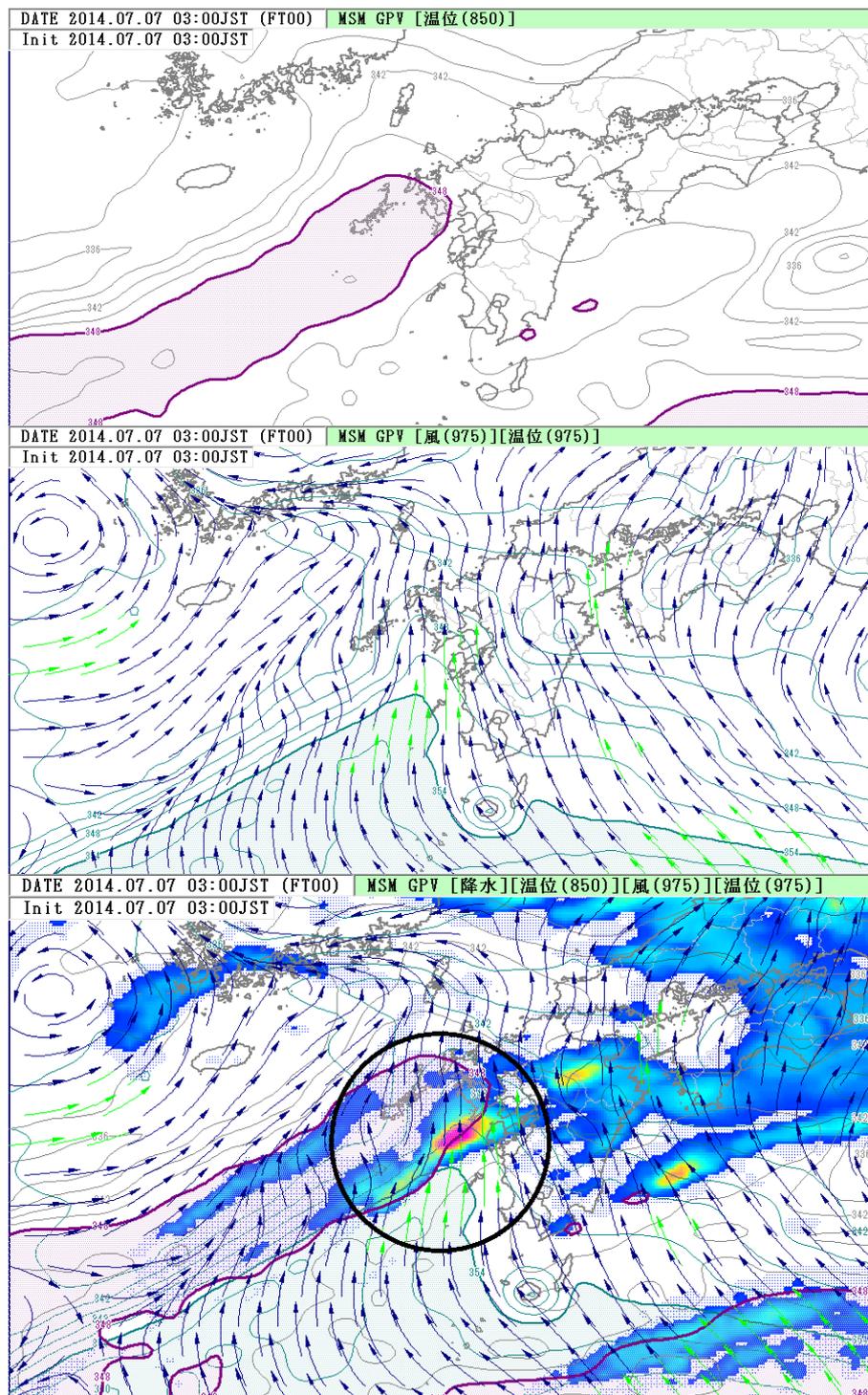


<MSM 重ね表示で、「湿舌」と大雨の関係がよく分かります>

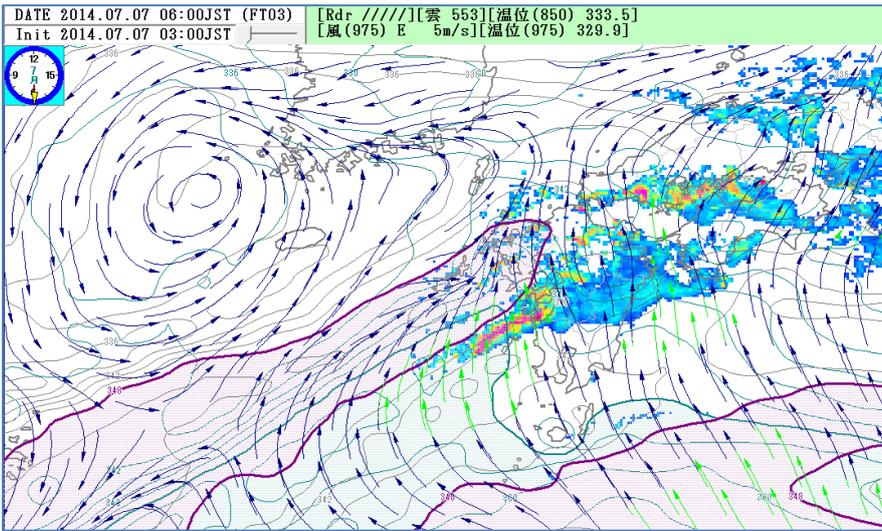
7月6日夜～7日朝にかけて、九州地方で線上降水帯が形成されて、所々で大雨になりました。MSMで見ると、大雨がどんな所で発生するか、よく分かります。850hPa～500hPaの大気中層に現れる湿舌と、大雨の直接の原因になる水蒸気が供給される、高度500m以下の高相当温位(354K以上)の空気の流れ込み方を重ねてみると、どんな所で雨量が多く計算されるかがよく分かります。

①MSM850hPaの相当温位(上)と、975hPaの相当温位・流線(下)の図を、それぞれ。重ねてみると…

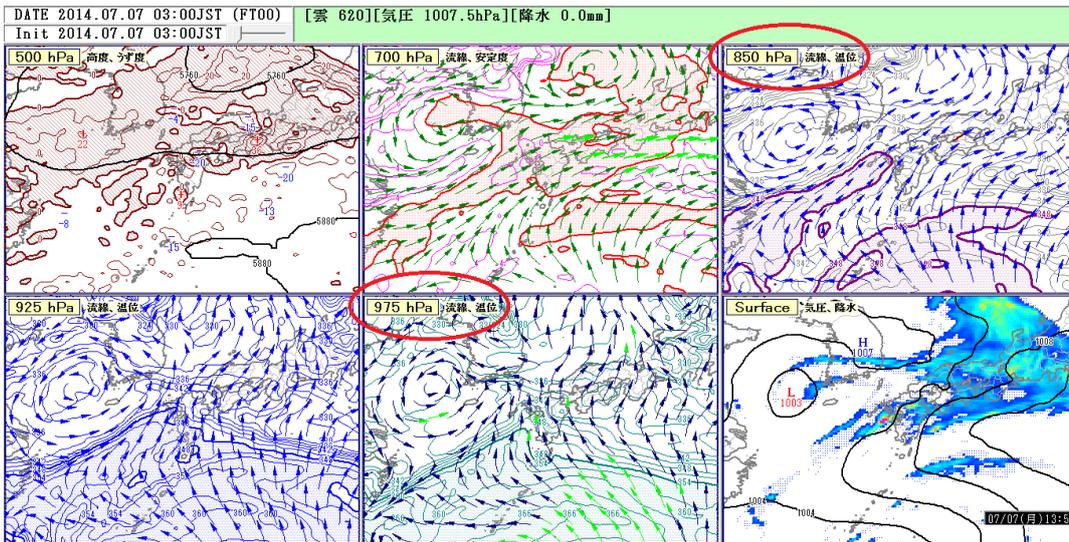


大きな降水量が計算されている所は、ちょうど湿舌の南端で、超下層に高相当温位の空気が、強い風と共に流れ込む所になっています。
実況で見えてみると…

②レーダーとの重ね。やはり、予想されていた湿舌の南端に線上降水帯を形成しています。MSM スゴイ！



③MSM 6 画面で見てる時にも、おや? と思ったら、すぐ重ねてみよう。



850hPa の相当温位と、975hPa の相当温位・流線を重ねてみます。どちらか一方の画面をクリックして Ctrl+C で画面をコピー。もう一方に、ペーストすれば…湿舌の南端で降水量が多くなっていることがすぐ分かります。

